

令和4年度 校長だより 第6号

1 2学期が始まりました。

新型コロナウイルスの影響が深刻な状況下で、2学期の始まりを迎えました。これまで以上に感染症対策を徹底し、学校生活を送るようにしていきましょう。

今年も残り4ヶ月。まもなく就職試験に臨む皆さん、科学技術高校で学んできたことを自信に、筆記や面接で存分に実力を発揮してください。また、進学を目指す皆さん、総合型選抜や学校推薦型選抜がすぐそこまで迫ってきています。それぞれ自分の道を切り開いていってください。1・2年次生の皆さんは、3年次生をみて、それぞれ2年後・1年後の自分をイメージしながら、有意義な高校生活にしてください。

2 Don't let other people decide what you can do!

～ 人に自分の可能性を決めさせない ～

8月10日、本校イングリッシュ・サマー・キャンプの事前研修において、アメリカ・ワシントン州在住の前田伸二さんとのオンラインセッションを行いました。

前田伸二さんは、北海道出身の方で、現在、ボーイング社の操縦席エンジニア、飛行教官、NPO団体の代表として活動されています。18歳の時に交通事故に遭い、脳挫傷のダメージを受けて生死をさまよい、片方の目の視力を失いました。日本では、障害者はパイロットになれない、仕事にも就くことができないと言われ、ハンディキャップがあることでの差別を経験されました。しかし、アメリカのエンブリー・リドル大学の教授と出会い、片目が見えなくてもパイロットになっている人がいることを教えてもらい、目が見えないからパイロットになれないという先入観は間違っていることを知ります。この経験から、正しい情報をもつことの大切さ、何をしたいのかわかっているのに、挑戦しないことがいかに不幸であるかを学んだそうです。



前田さん自身の体験から語られる言葉から、生徒たちは、「今までの常識を疑うこと、先入観をもたないこと」などのメッセージを受け取りました。そして、なぜ学校（社会）に行くのかという問いかけに、「『親友』をつくるため」と「『師』と出会うため」という、人との出会いを教えてくださいました。最終的に夢を実現するにあたって、「存在してくれるだけで十分」と寄り添ってくれた友人、「お前の挑戦はまだ始まっていない」と目を覚まさせてくれた先生の存在は非常に大きかったと話されていました。そして、「大切な人（家族）にもっと話をしよう」と語りかけてくれました。大切なその人たちは、自分を支えてくれる人たちです。自分がどんな思いをもち、またどのように目標に向かっているのかきちんと話し合うこ

との大切さを教えてくれました。前田さんにとって、大切な家族・お父様が理解を示してくれたことが、今のエンジニア、飛行教官、講演活動に活かしているそうです。

最後に、前田さんが、“Don’t let other people decide what you can do!”
(人に自分の可能性を決めさせない。) というメッセージをくださいました。



参加した生徒たちが大変感銘を受けていたことが、セッションのレポートから伝わってきました。その一部を紹介したいと思います。

- ・将来の夢をかなえるために、積極的に挑戦していく気持ちになれた。
- ・女性だから、ハンディキャップがあるから、〇〇だからとあきらめるのではなく、まず何かやってみる、またそれを実際に口に出して言う。そうすることで、様々な人からアドバイスや助けが得られ、道が開かれていくことがわかった。
- ・自分のやりたいことをやるために、目の前の課題からも逃げずに解決していきたい。
- ・勉強もしない、部活も頑張らない、何もしないで夢ばかりをみているのではなく、苦手な課題にも向き合っていきたいと考えられるようになった。
- ・まだ1年生で、将来の夢が決まっていなくて不安に感じていたけれど、自分の可能性を広げるために積極的に行動していくことで見いだせると思えるようになった。
- ・進路は決めているけれど、本当にそれで良いのか不安に感じていて、でも、今日の前田さんの話を聞いて、迷ってなんかいられない、夢を着実にするよう取り組んでいきたい！
- ・将来、自分が若い人たちに夢や希望を与えられるような大人になりたい。

このサマーキャンプが、英語力を身につけることはもちろん、一人ひとりの心に灯をともし人生のターニングポイントになることを期待しています。みなさんにとって、かえがえのない夏になる予感がしました。

また、サマーキャンプに参加していなくても、こうした話を知り、ハートに火がついてくれたなら、大変嬉しく思います。

「『可能性の扉を開く鍵』がきっと見つかる」 ☆科学技術高校☆